シュークリームの記憶

「これ美味しいわね。あなたが作ったの！？」母の口から陽気な言葉が溢れる。

「カスタードクリームが固めなのは冷蔵庫にいれていたからかしら」

93 歳の母は、父が亡くなってから徐々に認知症の症状が進み、以前のように「記憶がこぼれ落ちるようで、それが悲しいのよ」と言うこともなくなり、穏やかに暮らしている。会いに行って話をしても、私からの問いかけに、短く答えを返してくることが多くなった。小さな美味しいお菓子を持って行って、ホームに内緒だよとウインクしながら食べさせても、二口くらい食べて、美味しいわねと一言二言感想を言うくらいだ。

今年の 2 月に家の近所にあるクラシックな洋食屋に妻と食べに行った際、デザートで出てきたプリンが、なんとも懐かしい味だった。昔ながらのしっかりと甘く固めで小さな穴のあいたキャラメルソースのかかったものだ。テイクアウトができるというので、買って帰り、翌日、母に持っていった。母は、一口食べると、とたんに表情が明るくなり、「懐かしい味ね、昔は一緒に作ったわね」、といつもより発語も多く、活発な印象だった。

これだ！　こういう昔の記憶を喚起するものがいいなと思った私は、昔取った杵柄で、お菓子を作って、母に持っていくことにした。レシピは、子どもの頃に母とよく一緒に作った婦人之友社の「家庭でできる和洋菓子」だ。作るのは、カスタードのシュークリーム。あえて生クリームは入れずに、レシピ通りのしっかりとしたカスタードクリームにした。綺麗にふくらんだシューを見て、娘たちは、「いくつ作るの？」と聞く。要するに、自分たちの食べられるのはいくつなのかということのようだ。笑いながら、「大きく焼くから、一人 3 つね」というと、まず娘たちが喜ぶ。

翌朝、母のところにシュークリームを持っていって、レシピ本を出して、「これ覚えてる？」と聞くと、母は、ぱぁっと顔が明るくなり、「あなたがこの本を持っていたの！？」と、そして、シュークリームを取り出し、「食べる？」と聞くと「もちろんよ」。そして食べた時の反応が、冒頭のとおりだった。

認知症は、引き出しにしまわれた記憶が出にくくなっている物忘れと違って、新しい記憶が入力しにくいと言われるが、母にとって、40 年も前に息子と励んでいたお菓子づくりが味覚をきっかけに蘇ってきたようだ。レシピ本も、愛おしむように撫でながら、ページを繰っていた。

若い頃から、多くの介護の現場をお邪魔して、勉強させていただいたが、祖父母の介護を含め、家族から教わることも多いと感じている。母からもまだ教えてもらっていて、ありがたい限りだ。